人文科教育研究　21　1994年　pp. 13－24

昭和二十年代の国語学力観
――学力低下に関する新聞記事を資料として――

萩　原　敏　行

1．本稿の目的

第二次世界大戦後に日本で行われた，いわゆる“新教育”によって，学習者の学力低下という現象が生じたという見方がある。新教育では基礎的な学力は育たないというこの見方は，時に体験的に，時に当時の学力調査を根拠として語られている。しかし，いったい，この見方にはどれほどの妥当性があるのだろうか。

戦後の教育制度改革によって，日本は六三制の義務教育制度をとるようになった。それとともに，“新教育”といわれる新しい潮流がアメリカから流入し，児童観，カリキュラム観などを中心に，戦前から続いていた日本の教育観に強い影響を与えた。そのひとつとして本稿で取り上げる“学力観”の転換が位置づけられる。すなわち，“新教育”の特徴ともいうべき問題解決的な教育観によって，戦前の主知的な学力観が，経験的，体験的な行為を重視する学力観に転換されたのである。

また，国民学校令が施行された昭和十六年から，敗戦の昭和二十年の五年間にわたる期間と，昭和二十年以降の敗戦後の事態は，生活的，精神的な多くの社会的混乱を背景とする，戦後教育の様々な悪条件を生じさせた。

現在いわれるような，戦後の“学力低下”の問題は，上記のような新教育への質的転換と，戦中戦後の混乱などが背景になっている。

“学力”の低下，もしくはさらに限定して“基礎学力”の低下の問題は，戦後の新しい教育制度が施行されてから約一年後の昭和二十三年ごろから注目されはじめ，当時の様々な学力調査の立脚点になっている(1)。このように，学力低下の問題は，教育改革，教育調査の課題として教育の専門家を中心に研究される一方，「学力の問題については，教師や教育学者よりも先に父母たちが疑問をだしはじめていた」(2)という指摘にみられるように，戦後社会の大きな病理現象として，マスコミを中心に一般世論によっても強く主張されたという側面も持つ。

従来の新教育期の学力低下に関する研究では，戦後の学力低下を論ずるために，新聞などのマスコミを通じた世論の動向を取りあげるものは必ずしも少なくはない(3)。すなわち，当時の学力低下の実態を新聞の記事などを通じて立証しようとする試みが多く見られるのである。しかし，そういった学力低下に関する論考で扱われる新聞記事は，おおむね新教育に対して批判的なものであり，それゆえに当時の世論一般が新教育に対して批判的であったとの解釈を与えかねない側面がある。しかし，はたして，新聞に代表される世論一般は，本当に新教育に対して批判的であ

ったのだろうか，また，批判的であったとすれば，それは新教育に起因する国語学力の低下の実態を立証するために十分な妥当性を持つものであったのだろうか，という疑問が生じる。

本稿の目的の一つは，新教育期に国語に関する学力低下の問題が，実際，当時の新聞記事の上においていかに扱われていたかということを質的，量的に調査し，整理，解明することにある。

すなわち，国語学力の低下に関する新聞の記事が，どのような学力の低下を訴えるものであったのか，つまり，そこで問われる国語学力とはどのような学力観に基づくものであったのか，また，それらの記事が新教育の批判に対してどれほどの妥当性を持つのかということを明らかにしたい。

また，本稿のもう一つの目的は，昭和二十年代後半に生じた新教育衰退の原因を，基礎学力の低下に位置づけることがはたして妥当であるかどうかについて，当時の新聞記事を調査することで類推しようとするところにある。

これは，現在にいたるまで，国語教育の分野において国語単元学習的な方法論を批判するさいに何度となく用いられる考え，すなわち，“新教育期の単元的発想では国語の基礎的な学力がつきにくかったために，単元学習は衰退したのである”という考え[4]の妥当性を検討するものでもある。

本稿は，以上のふたつの目的に基づき，朝日新聞を調査対象とし，その期間を昭和二十年代とする。すなわち，終戦から昭和二十九年十二月三十一日までの朝日新聞記事をもとに検討をおこなう。

なお，記事を引用する際，旧漢字・旧仮名遣いは現代のものに改めた。

2．新教育期における学力低下の問題

本章では，昭和二十年代の朝日新聞記事において，新教育，および学力低下の問題をあつかったものを，特に国語教育の観点から検討する。

(1) 六三制発足以前

終戦後一年ほどたった昭和二十一年七月，「新しい児童文化の課題」と題する城戸の文章[5]が記事となり，そこにおいて「問題を解決する方法が新しい教育」であり，「自由教育は自由な立場から児童の個性を尊重して，児童に新しい文化を創造せしめ，独創力を喚起する方法」であるとされた。これは朝日新聞における“新教育”に関する最初の記事であり，その理想とするところが明らかにされているとみてよいだろう。

一方，城戸の記事の翌日，読者の投稿欄である〈声〉に，「子供の時間」[6]という投稿記事が掲載され，そこに「学業，能力の低下いたしております現在の子供たちに…」と記されている。この投稿記事が朝日新聞における学力低下関連の最初の記事といえる。

この投稿記事においては，具体的に何をもって学力の低下としているかは明示されてはいないが，同時期の他の投稿記事からその原因はうかがうことができる[7]。すなわち，この時期の投稿記事で批判される教育の状態は，「生活環境（食生活など）の貧困」「教育環境（学用品，教科書不足など）の不備」「教師の職場放棄」など，新教育の内容以前の，外的な教育環境の不備としてまとめることができる。

(2) 学力低下の「外容」的原因と「内容」的原因

これらの戦後混乱期の悪条件を背景に，昭和二十二年三月三十一日，教育基本法・学校教育法が公布され，同年四月一日より六三制が発足する。朝日新聞社が，社説としてこの六三制教育を初めて取り上げたのは，新制度発足後一年目の昭和二十三年五月二十九日である。

この社説「児童教育のむつかしさ」は，「六三制教育制度は発足してから一年以上になるが外容が整わないばかりでなく，内容の上でもまだまだ未熟の点が少なくないようだ。」という文頭にみられるように，従来の生活環境や教育環境などの「外容」面の批判に加え，六三制教育制度の「内容」面の欠陥ともとらえうる新教育自体の「未熟」さに対して問題提起をおこなったという点で着目すべき記事である。

社説は新制度によって生じた弊害を，「学力の低下」と「自由放任主義」との二点を交えて論じている。まず，社説のおおよその内容は次の抜粋にみられる。

> また教育方法が変わったために，先生自身が不慣れのためとまどいすることもあったろうし，こんなところから児童の学力の低下も生まれて来るだろう。児童がのびのびして来た反面，勉強を留守にして野球だけに夢中になったり，無軌道的になったりしている例も少なくない[8]。

ここでは，新しい教育方法に対する教師の不慣れとそれによる学力低下について，また，新教育によって児童が無軌道的になり勉強をしないということについて挙げられている。後者に関しては特に「新教育になってからの驕った自由放任主義の弊害」[9]，「いまのような社会環境では野放図な自由放任は，往々にして児童を反社会的なものとして成長させる」[10]，「新教育の求める自由が，児童に手放しで好き勝手なことをさせる意味でないことも確かであろう。」[11]などのように，新教育の実状を，自由放任で野放図なものとして批判しているとみることができる。

(3) 教育環境に起因する学力低下

一方，学力低下の「外容」的原因である生活環境・教育環境の問題は，具体的に次のような教育施設の不足に関する記事に見ることができる。

すなわち，六三制発足により，新たに新制中学校用の校舎が必要になる一方で，戦後の荒廃によって教育施設の絶対数が不足するという事態が生じている。また，その結果として，小学校における二部授業，三部授業がかなり多くの割合を占めるようになる。このような施設不足に起因する学力低下論は，戦中戦後に疎開先でおこなわれた青空教室によって生じた弊害として，また，教室が戦災者の収容施設として使用された際にもみられる。

しかし，具体的な調査結果をもとに記事になったのは，昭和二十三年六月の文部省による二部授業の弊害調査に基づく記事からである[12]。そこでは「弊害として学力が非常に低下し，定まった教室を持たないため児童は放浪性を帯び，この影響は校外にまで及んでいる」という文部省の見解が紹介され，具体的な数字が提示されている。また，教育施設不足に関しては，教室の他にも図書館，体育館などの不足が投書によって指摘されている[13]。特に学校図書館，および図書の不足は，新教育での調べる授業が成立しない原因として挙げられている[14]。

なお，昭和二十四年八月には文部省の六三制白書に基づき「教室がないため生徒の学力が低下し，青少年が不良化してゆく」と報告された[15]。また，昭和二十八年の時点でも，一学級六十人という事態が学力低下の要因として指摘されている[16]。このような教育施設不足の問題は，学習者の絶対数の増加にともない，昭和二十年代のうちに解消されることはなく，逆に数字的には悪化している[17]。

以上のように，昭和二十年代の学力低下論の「外容」的な要因として，朝日新聞紙上では教育環境に対する批判が繰り返し取り上げられた[18]。

(4) 読み書き能力に起因する学力低下

“国語学力”に焦点を絞った場合，戦後の様々な学力調査の中で，読み書き能力が国語の基礎学力として扱われているのはあきらかである。昭和二十三年に，文部省によっておこなわれた「読み書き能力調査」は，「従来ややもすれば抽象的，観念的な論議の対象にしかならなかったものを明確な具体的，科学的調査の対象」にしたもの[19]として評価された。実際，この調査結果をもとに，国語・国字は整理されることになる。しかし，国語・国字に対する一般大衆の意識が高まるにしたがって，教師の送りがな指導の不統一といった，さまざまな場面における混乱した国語・国字の使用状態を明示化する結果にもなった[20]。

漢字が書けるか書けないかという問題は，学力低下の実態として学力調査で取り上げられたが，その結果はおおむね学力低下論を裏付けるものとなる[21]。また，学習者の漢字を書く能力が低い原因としては，教科書などにおける教育漢字の不統一が問題視されていたが，この問題の解決は昭和三十年代に持ち越されることとなった[22]。

3．学力低下および新教育批判への反論

新教育になって，国語教育領域では読み書きの基礎学力が低下した，という見解に対し，その反論の観点にはふたつの傾向が見られる。すなわち，読み書き能力は低下していない，もしくは向上しているという観点と，戦前にはない新しい学力を獲得しているのだという観点である。本章ではそのふたつの観点を整理する。

(1) 読み書き能力は低下していないという観点

昭和二十五年までに各地でおこなわれた読み書き能力に関する調査と，その結果である学力低下の主張に対し，文部省は昭和二十五年一月から一年半にわたり全国で学童調査をおこなった。その調査結果が昭和二十六年六月の「案外よく知っている」[23]である。この記事で文部省は，教科書の字の配列を修正する必要のあることにふれながらも，「雑誌や絵本など課外読みものによって漢字を書く能力が思ったより高く，漢字の習得率は一般が心配しているほど低くはないと」と結論づけている。

また，昭和二十八年八月には国立教育研究所のおこなった学力水準調査の結果として次のような見解がなされた。

「比較する資料がないので決定的なことはいえないが，学力は一般に想像していたよりはよく，ことに六三教育発足当時に比べると毎年わずかずつだが学童生徒の学力が向上しているということはいえる。」(「毎年，少しずつ向上」[24]より)

文部省および国立教育研究所の調査結果は，いずれも国側の資料であり，また，「比較する資料がない」ことからその信憑性については検討する余地のあるものといえるかもしれない。しかし，当時の読み書き調査の結果には，このような肯定的見解も存在したのであるという意味においては貴重な資料といえる。

(2) 新しい学力を獲得しているという観点

前出[25]の城戸の新教育観のように，戦後の新教育は“問題解決能力”，“個性尊重”“創造性・独創性”の獲得が尊重される。また，修身，中学入試，軍隊教育，視学といった「恐怖の要素」を教育から減らしたのが「新教育の大きな長所」であるという宗像の指摘[26]によれば，学習者がしめつけから解放されたことによって獲得した能力が，戦前には存在しなかった新しい学力として生まれたことが考えられる。

周郷は，このような新教育の成果としてもたらされた新しい学力を次のように考察している[27]。

冒険をして，新教育の成果をひとことで言いあらわせというなら，それは子供たちが思い切って自発的なった，よく自分の意見をいう，場合によるとオシャベリになったということであろう。こども議会などでの子供の発言をきいてみると，おどろくほどの成長だと感じられる。

また，海後も次のように指摘している[28]。

物をつくり出す力，社会を見てこれをどう改革しようかと考えぬく力，こうした学力は読，書，算とは著しい差異のあるものであることがわかる。それらも合せて果たして学力は低下したかどうか。

漢字を書けるか書けないか，読めるか読めないかという“主知的な学力観”のもとにおこなわれる基礎学力低下に関する論調に対して，“自発性，創造性を重視する学力観”が伸長しているという主張は，いくつかの事例のなかにも読みとることができる。

たとえば，「社会科の効果」[29]として宮原に挙げられた事例には次のようにある。

「どうも一般に年長の青年たちよりも新制中学校を出て間もない年少の者たちの方が発言が活発で，身のまわりについての問題意識を持っている」

「いまのおとなたちが同じ年頃の時代には想像もつかなかったような自主的な生活態度が，この青年たちのあいだに育ってきていることは事実である。」

また，同じく宮原に次のような指摘がある[30]。

中学校の社会科の討議「多数決とはどういうことか」で，生徒たちが民主主義だの議会政治だのということばは空論だという結論を出した。「三年生だから，もうよく新聞をよんでいるので，さかんに意見が出た」

このふたつの例は，社会科の事例ではあるが，このなかに明確な国語学力を見て取ることができる。すなわち，討議の能力，新聞などからの情報収集能力，自分の意見を持ち，それを集団の中で活発に発表できるという能力などである。

こういった能力の伸長に関しては，当時頻繁におこなわれた学力調査の中にも見ることができる。たとえば，日教組の昭和二十八年全国教育研究大会の報告記事の中には，漢字を書く力が戦前よりも二年低下しているという学力低下の指摘がある一方で，「五－話す力や聴く力は大した見劣りがなく，ことに話すこと全体については最近の子供の方が伸びて来ている。」という肯定的な評価がなされている[31]。

以上のように，戦前の学力観に基づく学力調査の結果と，戦後の学力観に基づく学力の伸長に関する諸論とには大きな食い違いがあるように思われる。それは海後の指摘するように，「学習指導の内容や着眼がすでにはなはだしい変化をしている」ためであり，「制度が変わった」ためであり，それゆえに新旧両制度下で学習したもの同士を「比較できない」ためである[32]といえよう。

4．新教育観に基づく国語学力観の衰退

前章でふれたように，新教育期の国語学力観は，漢字の読み書き能力の低下をもって主張された学力低下論によって，必ずしも全面的に否定されうるものではない。それにもかかわらず，戦前の主知的な学力観に基づく学力低下の主張に飲み込まれてしまった背景として，朝日新聞の記事からは，三点の類推をすることができる。

そのひとつは，新教育期において重視された国語学力観が，適正な評価をくだされることがなかったという見方である。これは，「おしゃべりは達者だが，読み書き能力に乏しい子供が大勢出来ているらしい。」[33]という記事に代表されるもので，“自発性・主体性”が“でしゃばり・生意気・自由放任”に，“発言力”が“おしゃべり”に，“思考力”が“へ理屈”になったものである[34]。

またひとつは，昭和二十年代もおわりになっても，いっこうに教育環境，教育方法の改善がなされなかったために，“個性尊重”や“問題解決的学習”ができなかったという見方である。子ど

もの数は増加し続け，それに伴う学級の混乱が生じている[35]。また，具体的方法論の伴わない，理念的な“新教育観”に対する疑いも見られる[36]。

そして，昭和二十年代末の朝日新聞の記事で，もっとも特徴的ともいえるのが“入学試験の問題”である[37]。入学試験の問題は「暗記能力や，概念的知識の集積」[38]を要求し，「理解力，分析力，批判力など，本質的な思考能力」[39]といった“新教育的”な国語学力観が求められない。

もちろん，これらの見方の他にも，講和条約を契機とした教育の復古的見直し[40]など，様々な要因が考えられるであろう。

5．昭和二十年代の国語学力観

以上，昭和二十年代の新教育期における学力低下問題を中心に，朝日新聞の記事をみてきた。この調査によって，当時の新教育的な学力観の衰退と学力低下の問題について，国語教育の観点から次のような仮説をたてることができる。

○　新教育が，漢字の読み書き能力のような学力を低下させる一因になったことは否定できない。(国語学力観の違いによる指導目標のずれ)

○　しかし，当時の学力調査に基づく低下論で，新教育的な国語学力観を批判・評価することにはあまり妥当性がない。(基礎的な国語学力観の違い)

○　国語学力の低下原因の多くは，戦中戦後の教育的環境の混乱と教師の質の低下にある。

○　新教育の衰退は，新しい国語学力観に基づく方法論が確定する前に，入学試験といった学習者の要求に対応する形で，主知的な国語学力観が台頭したことによる。

朝日新聞の記事という限定された調査対象から得られたこれらの仮説の多くは，依然，論証に不十分であり，他の文献との検討を必要とするものである。特に，これらの調査のみから，表題にある昭和二十年代の国語学力観を明らかにできたとはいえない。しかし，朝日新聞という一つの大衆的なマスメディアを通じての調査，検討は，新教育の衰退，および単元学習的な国語学習の衰退にマスメディアがはたした役割を考えるさいには示唆を持つものと思われる。

[注]

※　注における資料番号とは，後に提示した「資料．国語学力関連記事一覧」の通し番号を指す。

（1）　久保舜一『学力検査と知能検査』(東京大学出版部，S.26) など。

（2）　大田堯編『戦後日本教育史』岩波書店，1978.6，P.231

(3) 青木誠四郎他『新教育と学力低下』(原書房，S.24.12.20) など。

(4) このような考えの一例を挙げると次のようなものがある。須田氏は昭和二十年代の学習指導要領の目標に沿うような単元学習について次のようにふれている。

この様な単元学習の発想では，言語能力の基本的学力がつきにくいのである。児童生徒は，日常の中で沢山の言語活動を行っているが，言語に対する自覚という点で無意識である場合が多い。言語の能力は，単に生活経験の中で言語を使用している，また，させているだけでなくて，言語そのものの知識・理解・表現の基礎的な学習を通さなければ身に付く力とはならない。

(須田実「倉澤栄吉『単元学習』の効用と限界(1)」『教育科学国語教育』1993.6，PP.113－114)

(5) 資料番号1

(6) 資料番号4

(7) 資料番号3．5．6．などの投稿記事。

(8) 資料番号8，2段

(9) 同上　3段

(10) 同上　4段

(11) 同上　4段

(12) 資料番号9

(13) 資料番号64．73.

(14) 資料番号72

教科書の「終わりに「くわしく調べてみよ」といって，いくつかの問題があり，その後に参考書の名前がいくつも出ています。これは自分で調べる力をつけるようにしてあるのかもしれませんが，それにしても，今の教科書は，参考書を利用する点があまりにも多すぎる」という批判の裏には，実際に村の中学校では本が少なくて調べられないという事情が指摘されている。

(15) 資料番号17

(16) 資料番号66

(17) 資料番号74では，小見だしとして「机も小さく“圧縮授業”／慢性化した二部制／“青空教室”も再現」とあり，二部授業の復活，教員の不足：補助教員も足りず自習授業，圧縮授業：最高77人／机の小型化／授業時間の縮小，仮教室：体育館，理科，音楽室などの特別教室の普通教室への転用／階段下，廊下　などが指摘されている。また，翌昭和三十年度も，さらに77万人の増加で，教育環境の悪化が指摘されている（資料番号83)。

(18) 資料番号9．15．18．など

(19) 資料番号11

(20) 資料番号16．18．23．30．など

(21) 資料番号18など

(22)　資料番号22．30．39．59．など
(23)　資料番号22
(24)　資料番号62
(25)　資料番号１
(26)　資料番号26
(27)　資料番号24
(28)　資料番号40
(29)　資料番号47
(30)　資料番号45
(31)　資料番号49
(32)　資料番号42
(33)　資料番号50
(34)　資料番号８．50．63．など
(35)　資料番号74．83．
(36)　資料番号40．58．
(37)　資料番号20．53．54．55．65．69．70．79．82．84．85．86．
(38)　資料番号55
(39)　同上
(40)　資料番号33．35．37など

資料　国語学力関連記事一覧

1	21. 7. 1	新しい児童文化の課題（城戸幡太郎）
2	〃	子供に遊びを（青木誠四郎）
3	7. 2	〈声〉少国民の叫び
4	〃	〈声〉子供の時間
5	7.18	〈声〉中学生の願い
6	8. 1	〈声〉薄っぺらな教科書
7	10.15	公民的精神を指導／こうして防ぐ青少年の不良化
8	23. 5.29	〈社説〉児童教育のむつかしさ
9	6. 4	ふえる二部授業／低下する児童の学力
10	〃	〈声〉正しい国語
11	8. 8	〈社説〉読み書き能力調査の意義
12	8.29	国語能力の試験／改革の具体的資料に
13	12. 6	学校を「小社会」に／生徒が体験で勉強
14	24. 3.11	平均点わずか23点／振わぬ「進学適性検査」
15	4.26	学力ガタ落ち／原因は先生の質の悪さ／新制中学卒業生
16	7.14	男83点・女73点／読み書き能力の成績判る
17	8.23	目立つ学力の低下／不良化も教室不足で／六三制白書
18	25. 2.20	学力低下の実態／「先生」とも書けぬ／大きく響く教育環境
19	6.14	〈社説〉国語の混乱をどうするか
20	26. 2. 2	なくならぬ準備教育／＝アチーヴメントテストの功罪＝（依田新）
21	5. 5	〈社説〉子供と語り合おう
22	6.15	案外よく知っている／“漢字を書く能力”／文部省の学童調査
23	7.14	国語・算数能力の実態／大衆は字を知らぬ／東大の調査報告を見て
24	7.18	おしゃべりになった子供／新教育の成果（周郷博）
25	9.10	〈教育〉個人の訓練に主力（福原麟太郎）
26	9.14	教育の行く道（宗像誠也）
27	10.15	〈社説〉教育制度改革の問題点
28	10.30	六三制をどう思うか／本社世論調査／関心薄いがマア賛成
29	10.31	〈社説〉子供の教育に対する関心
30	11. 9	〈声〉学力低下の一因
31	11.22	“学力の差”は争えぬ／ふえる「夜間中学」の悩み
32	〃	〈声〉混迷の教育界
33	12. 2	〈社説〉教育改革案は慎重に
34	27. 1. 1	新たなる統一へ／独立後の教育について（柳田国男）
35	1. 8	〈社説〉教育の前進
36	1.19	教育はどうなる／不安を抱く地方の教員（石黒修）

37	2.20	新教育以前の問題／－意地と骨なし－（大田尭）
38	4.7	漢字教育に基準／まちまちな検定教科書
39	5.3	児童憲章から一年たったけれども…
40	5.14	学力低下を防ぐ道（海後宗臣）
41	5.15	〈今日の問題〉教育週間の反省
42	6.6	〈声〉新教育の方向
43	6.23	〈時評〉子供の絶望（宮原誠一）
44	9.18	ペスタロッチーに還れ／＝祖国復興の新教育＝（長田新）
45	11.11	〈社説〉教育審議会の発足を急げ
46	12.5	〈声〉向上せぬ学力
47	12.20	〈一言〉社会科の効果（宮原誠一）
48	28.1.9	〈一言〉新制の卒業生（橋口隆吉）
49	1.26	戦前よりも二年低下／小・中学生の国語，数学の能力／教研大会
50	1.27	〈今日の問題〉読み書き能力
51	1.30	〈論壇〉低い新制大学生の学力（斎藤継男）
52	2.3	〈論壇〉試験地獄の防ぎ方（小保内虎夫）
53	2.4	〈社説〉高校進学期に当って
54	〃	〈学芸〉進学適性検査と入学試験（中島正信）
55	3.10	〈一言〉不可解な入試（吉田精一）
56	3.22	〈声〉通知表の問題
57	3.24	〈声〉個性の評価
58	7.7	〈学芸〉新教育がえがく波紋
59	7.28	教育漢字の学習を統一／十八校に“実験学級”
60	7.29	〈声〉基礎教育の軽視
61	8.9	読み書きの能力調査／来年度満十八歳の青年層に
62	8.22	毎年，少しずつ向上／国立教育研究所の調べ／小，中学生の学力
63	〃	〈声〉“理屈をこねて…”
64	9.21	〈声〉六三教室
65	〃	〈家庭〉学齢前の子供にはどんな知識を与えたらよいか
66	9.29	〈声〉多すぎる児童
67	12.18	去年よりも悪い成績／適性検査概況発表／設問形式が変わって
68	29.1.26	指導要領の不備から／国語，算数の学力低下／全国教育研究大会で報告
69	2.16	〈今日の問題〉入学シーズン
70	3.1	〈声〉無理な入試
71	3.2	〈声〉漢字の筆順について
72	3.25	〈声〉教科書は親切に
73	3.28	〈声〉学校図書館の充実
74	4.13	『耐乏』強いられる小学生／昨年より50万人増で大混乱

75	〃	〈論壇〉新しい教育の方法／問題解決のための知識を（大塚明郎）
76	4.25	正しい幼稚園教育のために…／体力や言語能力測定
77	5.30	教育二法案　秘密保護法案／「参院修正」で成立
78	7.5	夏休み練習帳の採用
79	10.20	試験地獄再来か／ひびく進適廃止
80	11.8	〈声〉学校新聞の在り方
81	11.11	〈声〉学校新聞の指導
82	11.13	〈学芸〉試験というもの／賛成論者の立場から（桶谷繁雄）
83	11.14	新入生ラッシュ／小，中学生に暗い春／また77万人ふえる
84	12.3	入試を目指し“私塾”大流行／分教場など顔負け
85	12.6	〈今日の問題〉栄える私塾
86	12.13	〈声〉○×式教育の反省
87	12.20	平がな教育再検討／中央教育審議会答申
88	12.29	〈学芸〉出版会社の自殺的行為／小学校教科書の漢字統一（石黒修）